

壁画

歴史家は、金堂の壁画の制作年代は7世紀、法隆寺の建造中の時期にまで遡ると推定している。壁画にはインド、中国、朝鮮、日本の影響が融合しており、長年にわたって研究者たちを魅了してきた。この壁画は、聖徳太子が中国や朝鮮に使者や学僧らを派遣した後の知的な異文化交流や、当時の日本文化の開放的な気質を示している。千年以上の年月を奇跡的に生き延びてきたこの壁画も、1949年の火事によりその大部分が損傷を受けてしまった。その後焼損した壁画は収蔵庫に保管されている。火事の影響は、菩薩や弟子たちに取り囲まれて天蓋の下に座る如来を描いたこの絵にもはっきりと見てとることができる。2015年、法隆寺は文化庁とともに、焼損壁画および老朽化した収蔵庫をこれ以上の損傷から守るための保存作業に着手した。